

嘘つきが育つ家庭環境

宮城県仙台第三高等学校 普通科

要旨

私達は自分を表現し、のびのびと成長できる子どもを増やすことを目的に、嘘をつく子どもが育つ環境について探求を行った。先行研究から、「嘘つきであるか」と「親の言いなりだった」に関連性があることを知り、「親の過度な干渉は嘘つきにつながる」という仮説を立てた。しかし、臨床心理学科の香川克先生にお話を伺った際に、嘘つきにつながるのは親の過度な干渉だけではなく、無干渉が最も子どもに強い影響を与えると教えていただいた。そして、アンケート調査を行った結果、無干渉の中でも優しさにおける欠如がより大きく子どもに影響している可能性が指摘された。自分の生まれた環境を受け入れるままにならないことが必要だ。

1 はじめに

自分をよく見せるため、誰かを守るため、利益を得るためなど、嘘を付く原因は様々であるが、中には幼い頃に親に対して「いい子」を振る舞っていたために自然と嘘を付くようになってしまった子どもがいる。私達は、このような子どもが育ってしまう環境について探究し、そのような環境になっている家庭に向けて提案することで、本来の自分を表現し、のびのびと成長できる子どもを増やすことを目的としている。

2 先行研究と仮説

嘘をつく人と騙される人のパーソナリティに関する研究では、大学生を対象としたアンケートの中から58名のデータを使用し、「嘘つきであるか」と「親の言いなりだった」について関連性を検討した結果、嘘つきな人は親の言いなりが多かったことがわかった。

次に、嘘の発生とその展開についての研究では、嘘をよくつく子どもには2つのパターンがあると示されている。第一は、親の構いすぎにより自立を妨げられるために嘘をつくこども、第二は、親や周りからの保護が少ないために嘘をつく子どもである。また、大人は自分が子どもについて知

らないこと(秘密の世界)があることを認めて、嘘をつかざるをえない状況に追い込まないようにすべきだと述べられている。そして、親に正義感、責任感が強いほど、親は「子どもを守らなけ

ればいけない」、子どもの場合は「親から自立したい」というジレンマに陥ってしまうことがわかった。

これらの研究から、「親の過度な干渉は嘘つきにつながる」という仮説を立てた。

3 香川克先生(京都文教大学臨床心理学部教授)のお話

修学旅行で京都文教大学を訪問し、香川克先生にお話を伺った。それによると、優しさと厳しさは、直角に交わり、4つの場合に分けて考えられる。(図) 一番ふさわしいのは、優しさと厳しさが両立する権威的態度で、子どもに与える影響が最も強いのは、ネグレクト型態度だという。

さらに、親が物理面・精神面、どちらにおいてもある程度満たされている場合、子どもの心は親の影響などで満たされていき、そこから秘密の世界ができる。それが外に出ることを第二の誕生と言う。親がどちらか一方、もしくは両方満たされていない場合(ネグレクト型態度、過保護型態度)、子どもの心が十分に満たされない。ネグレクト型な親の場合は、子どもに与えられるものがないために、子どもの心は満たされない。過保護型な親の場合は、子どもを自分の一部とみなし、子どもの秘密の世界があることが認められず、第二の誕生を妨害してしまう。

以上のことから、嘘つきにつながるのは親の過度な干渉だけではないことがわかった。

4 考察

仙台第三高等学校三年七組のうちの完答者29名を対象にアンケート調査を行った。優しさ(応答性)と厳しさ(要求性)に分けた、家庭環境に関する質問と「親に対して自分はよく嘘をつくか」という質問を5段階で評価してもらい、その関係を調べた。

結果、優しさ(応答性)と嘘のつきやすさに関しては相関係数(-0.5146483879)と中程度の相関が見られ、優しさが少ないほど嘘をつきやすかった。厳しさ(要求性)と嘘のつきやすさに関しては相関係数(0.03501165634)とほぼ相関が見られず、この二つは関係がないことがわかった。

5 まとめ

香川克先生によると、子どもの健康的な成長に大切なことは親子の間に適度な境界を作ることだという。この境界は親だけでなく、子どもの努力によって作ることが可能である。自分の生まれた環境を受け入れるまにならないことが必要である。また、私達のアンケートの結果「無干渉」の中でも優しさにおける欠如がより大きく子どもに影響している可能性が指摘された。しかし、アンケートの質問事項の客観性や標本数においては疑うべき点が多くあることは確かであり、より正確なアンケートによる調査が必要だ。

参考文献

abstract

Our research topic is “The environment that grows a liar”, and the focus of our research is increasing the number of children who can say what they want to do. Through previous research, we set up a hypothesis that meddling has the biggest influence on becoming a liar. We visited Kyoto Bunkyo University, and we talked with a professor of psychology. He said that neglect has a bigger influence on children than others, so we also need to consider the relation between environment and neglect. Future work should take surveys to find the environment that grows a liar.

1) 虚言癖に関連する病気と直し方、接し方を公認心理師が解説、ダイコミュ心の病気の治し方(2024) 心の病気と治し方.

Available at: <https://www.direct-commu.com/mental-illness/lies/>

(Accessed: 14 August 2024).

2) 嘘をつく人と騙される人のパーソナリティに関する研究(2009) Available at: https://adm.osaka-shinai.ac.jp/upload/library_bulletin/file/43/adachi_compressed.pdf (Accessed: 10 October 2024).

3) 嘘の発生とその展開(2014)

Available at:

<https://yamanashi.repo.nii.ac.jp/record/772/files/KJ00000560896.pdf>

(Accessed: 31 October 2024)

4) 親の養育態度と子どもの行動傾向に関する基礎研究(2021)

Available

at:

<https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/978>

(Accessed: 29 December 2024)

5) 父親・母親の養育スタイルに関する大学生の回想とアイデンティティ形成(2018)

Available at:

<https://doi.org/10.4992/jjpsy.89.16071>

(Accessed: 29 December 2024)

図

